

# 土葬から火葬へ

新たな納骨施設設営の上での3つのタイプ：熊本県下の事例より

Shift from Burial to Cremation : A Case Study of Three Types  
of Establishment of New Charnel Facilities in Kumamoto Prefecture

SEKIZAWA Mayumi

## 関沢まゆみ

### 1 はじめに

1960年代から70年代にかけての高度経済成長期を経て、日本の各地で一斉に遺体処理の方法は土葬から火葬へと大きく変化していった。国立歴史民俗博物館『死・葬送・墓制資料集成』1～4(1999年・2000年)の調査結果によると、遺体処理の方法は、1960年代以降、1990年代の間に土葬やノヤキ(野焼き)と呼ばれる村における伝統的な火葬から公営火葬場の利用へと変化してきたことがわかる(表1)。

表1 遺体処理の方法の変化

	1960年代	1990年代
土葬	30	6
火葬(伝統的)	25(12)	51
未記入	3	1
合計	58	58

国立歴史民俗博物館『死・葬送・墓制資料集成』(1999・2000)より  
(数字は事例数)

また、伝統的に土葬が行なわれてきた地域における火葬の導入によって葬送儀礼がどのように変化したかについては、土葬では生仏なまぼとけで葬儀が行なわれていたのが、火葬になると葬儀より先に遺体を火葬し、その焼骨による骨葬が行なわれるようになってきたという指摘(1)もなされている。

その後も比較的長く土葬が続けられていた滋賀県や三重県の志摩地方ほか中山間地域の村落においても、2000年代に入ってから急速に公営火葬場の設営とその利用が増加してきている。それに伴って、家ごとに納骨可能なカロート式の石塔を建立したり、近畿地方の村落ではサンマイと呼ばれる埋葬墓地の利用がその終わりを迎え、新たに石塔を建てた共同墓地の区画を設営したり、あるいは浄土真宗の寺がリードして集落単位の共同納骨堂を建設したりなど、さまざまな変化がおこっている。それについては、拙稿「土葬から火葬へ—火葬の普及とサンマイ利用の変化：滋賀県下の事例より—」(2)において報告しておいた。高度経済成長とその前後の大きな生活変化を列島規模で追跡確認する作業は民俗学にとって重要であり、2007年以降、本館の共同研究の課題ともなってい

<sup>(3)</sup>。その一環として本稿では、熊本県菊池郡大津町における火葬の普及と墓地の変化と、それに伴う盆の墓参習俗の変化についての調査報告を行なっておく。

## 2 土葬から火葬へ

**土葬とヤギユウ** 大津町は、平成24年(2012)現在で、世帯数12,555戸、人口32,537人の町で、熊本市街と阿蘇山との中間に位置し、町の中心部は江戸時代から肥後熊本と豊後大分とを結ぶ豊後街道の宿場町として栄えてきた。町域の北部は阿蘇外輪山西部に連なる森林、原野地帯から緩やかな傾斜の広がる畑作地帯が広がり、南部は阿蘇山を水源として東から西へと貫流する白川の流域に広がる水田地帯からなっている。近年では、国道57号線(長崎—雲仙—大分)と国道325号線(久留米—阿蘇—延岡)が横・縦断し、九州縦貫自動車道の熊本ICにも近い立地条件から、製造業部門を中心とする産業発展とともに、牧畜を中心とする農業経営と耕地面積の維持も比較的実現して、田園産業都市を標榜している町である。

この大津町域では、墓地は基本的に集落ごとに山の斜面側や白川近くの平地などに設けられている。もともと土葬が行なわれていたが、そのころは埋葬すると土饅頭を作り、その上に、ヤギユウ(家形・屋形、ヤギョウのことか)と呼ばれるものがかぶせられていた。そのヤギユウというのは小さな山車のかたちをしたもので、上に宝珠をつけていた。土葬のころの墓地の景観とはその小型の家のようなヤギユウが一面に広がる景観であった。それが風雨にさらされ朽ちて傾いたりして見苦しくなると、5年くらいして、一人ひとりに小さい石塔を建てるが多かった。これは俗名が書かれた墓標であり、墓地にはこれが林立していたという。たとえば、錦野地区に住む高本梢氏(昭和18年生まれ)によれば、個々の墓は故人をしのぶ大切なしるしであり、昔は、遠方に住んでいる人など、お盆にお墓参りにくると故人の石塔に抱きついて泣いている人もいたという。

**火葬への変化** 大津町営火葬場は、町の西、室地区にある。昭和60年(1985)に新築されて菊池市などとも共同利用する菊池広域連合大津火葬場になった(写真1)。また大津町域では、隣接している熊本市戸島の火葬場もよく利用されている。

土葬のころの墓石、石塔にはもちろん納骨のためのカロートはなかった。火葬になってもカロート式石塔でない場合は、土中に埋めて土葬の時のように上にヤギユウを置いていた。

土葬から火葬への移行については、昭和47、48年頃に、火葬が大々的に行なわれるようになったと多くの人が記憶している。錦野地区で葬式の時のヤギユウ作りをはじめ、野辺送りの道具なども扱う雑貨店を営んでいた野田氏の家では、火葬への変化をいち早く感じ取り、昭和42年(1967)に錦野地区の御的集落では一番早くに納骨式の新しい大型石塔を建てたという(写真2)。その野田氏が作ったような新しい納骨スペースを下部に備えた巨大な石塔が、現在ではこの大津町をはじめ、熊本県下の各地に見られる。一方、鹿児島県下でもこのタイプの大型納骨石塔は見られるので、九州地方でこの新しいタイプの大型石塔の出現の背景と現在の分布についてはそれを追跡できる今のうちに試みることは重要である。

その新しい納骨式の石塔を建てるにあたっては、それまでの土葬の墓地を掘り起こさなければならなかった。熊本市のT石材店がK町在住の人たちを雇って、家ごとに土葬されていた墓を掘り上げて、出てきた遺体を焼いて、甕にまとめて入れて納骨式の墓石に納めていった。甕に遺体を入

れる土葬がこの地域では広く行なわれていたため、新しい遺体の場合は、腐敗が進んでいる途中の場合もあり、甕の底には流れ出た体液や雨水なども貯まっていたり、髪の毛も腐らずにそのまま出たりして、気味が悪く、その処理は並大抵のものではなかった、それは大変な仕事だった、とその世話などを体験した野田氏は当時を回顧している。誰にでもできる仕事ではないということで、普通の日当1,000円くらいのところ、3,000円で働いてもらい、毎日一緒に酒を飲んだという。

### 3 墓地と石塔の変化

#### (1) 大津町域の事例

**3つのタイプ** それまで土葬で行なわれていたのは、土中に甕に入れて埋葬されその上にヤギユウが据えられ、数年後に墓石、石塔が建てられる、という方式であったが、土葬から火葬への変化に対応して、それが失われていき、新しい火葬では、火葬場から持ち帰られた遺骨が墓地に納められるに際して、その納骨さ

れる場所の確保の必要性が生じた。そこで、この大津町域の諸事例ではどのような方式が採られたのか、という点に注意してみると、大別して次の3つのタイプが採られたことがわかる。

- (A) 家ごとの単体の石塔の大型化であり、通常の大形の先祖代々墓の下部の台座部分に納骨設備を加えたきわめて大型の石塔を建ててそこに納骨するというもの（写真2・3参照）。
- (B) 家ごとの先祖代々墓の石塔がそれぞれ下部の台座部分に納骨設備を備えながら横に一繋がりになっていわば連結式のかたちを採ったもの（写真4・5参照）。
- (C) 家ごとの先祖代々墓の石塔は建てずに、従来の集落ごとの墓地利用関係者が一つになって、きわめて大型で外見では寺院と思われるような大型納骨堂を建設して、その内部に個々の家の納骨棚を設けるといふかたちにしたもの（写真6・7・8参照）。

この3通りの方式である。以下ではそれぞれについてみていくことにする。



写真1 大津火葬場



写真2 昭和42年(1967)に御的では最も早く建てられた納骨式の石塔。(A)



写真3 昭和50年(1975)前後、この下陣内の墓地でも家ごとの納骨式の石塔が建てられ始めた。(A)



写真6 大型納骨堂の内部(後迫。水月院境内)。昭和42年(1976)建設。(C)



写真4 横にひと繋がりになった連結式の石塔。下部が納骨施設。上町, 昭和51年(1976)建設。(B)



写真7 大型納骨堂(灰塚)。昭和50年(1975)建設。一見寺堂のように見えるが、納骨施設である。(C)



写真5 横にひと繋がりになった連結式の石塔。下部が納骨施設。寺崎組, 昭和58年(1983)建設。(B)



写真8 大型納骨堂(下町)。昭和51年(1976)建設。周囲には納骨堂を利用していない家の石塔もみられる。(C)

### (1) 家ごとの納骨施設付き大型石塔 (A)

写真2・3がそれである。土葬の時に使用していた自分の家の区画の墓域を掘り起こして、遺骨をまとめて焼き、それをカロート式の納骨施設付きの大型石塔を建立して納めたものである。台座部分が極端に大型化している点の特徴である。

**錦野地区の事例** 大津町南部の錦野地区は御的<sup>おまた</sup>、中栗<sup>なからじ</sup>、中良地<sup>かみあげ</sup>、上揚の4つの集落からなり、家数は100軒に足りないくらいである。いずれも集落ごとに共同墓地があり、土葬から火葬へと変化するなかで、家ごとにカロート式の大型石塔を建立していった。たとえば、御的では、一番早くに石塔を建てたのは前述のように昭和42年(1967)の野田家であるが、高本家では平成24年(2012)の秋に建立予定である。このように建立時期は、家ごとの事情による。

**岩坂地区中島の北組、中組、南組の事例** 中尾精一氏(昭和30年生まれ)によれば、大津町南部の岩坂地区の中島集落は、北組、中組、南組、寺崎組の4つの組からなり、計50軒前後である。中組と南組、北組は共同で昭和52年(1977)8月に中島霊園を整備した。景観的には、上の墓と下の墓があり、上は北組が、下は中組と南組が利用している。家ごとに区画されており、それぞれ新しく納骨式の大型石塔を建立している。

中組の区長が引き継いでいる『昭和二十九年五月再起 埋掘帳 中組』という、組の家の者が亡くなった時の記録(死亡年月日、氏名、年齢、墓当番の名前などを記載)によれば、昭和51年(1976)7月19日に死亡した男性(79歳)の時点までは土葬であったことが確認される。

この他、大津町陣内地区の中陣内、下陣内、森なども家ごとに納骨式の石塔を建てている。

下陣内の墓地では、比較的早くこのような納骨式の大型石塔にしていたのは、昭和47年(1972)、昭和49年(1974)、昭和50年(1975)の事例で、この頃に火葬に変わっていったという。また、このような新しい大型石塔の建立にあたっては、父親一人の名前で建てると悪いことがあるというので、息子と連名にしているという例が多い。

### (2) 連結式の画一的横並びの石塔 (B)

写真4・5がそれである。これは岩坂地区寺崎、同阿原目、上町などにみられる例であるが、火葬になったとき、各家でそれぞれ納骨式の石塔を建てるのではなく、その墓地を利用している家々が一緒になって、それぞれが納骨スペースを備えた連結式の横並びの石塔を共同して建てたものである。

**岩坂地区中島の寺崎組の事例** 中島地区の寺崎組は、水田の広がる中の字西津という地名の一面に共同墓地があり、現在5軒(中村家、中尾家各1軒と荒木家3軒)で利用している。土葬の頃は、それぞれに木の墓標や石塔を建てていたが、火葬になったとき、その墓地を掘り起こして納骨式の同じ形の連結式の石塔にした(昭和58年7月)。阿原目の浄仙寺(浄土真宗)の門徒と他の地区の寺の檀家もあるが、その檀家寺の別に関係なく共通の連結式の石塔にしている。また、墓域には、昔の墓地にあった個人ごと家ごとの石塔も片隅にまとめられている。

**岩坂地区阿原目の事例** 片山敬一氏(昭和24年生まれ)によれば、阿原目は18軒の集落で、浄仙寺の門徒である。道路沿いの山際に阿原目の墓地がある。昔は個人墓地がバラバラにあったが、昭和50年代になってから整理し、JAの紹介によって現在のような同じ形の納骨式の連結式石塔が

建てられた。

**上町の事例** 町は西方、中方、東方の3つに分かれており、墓地は、中方と東方は尾の上墓地、西方は西の墓地を使っている。また東方の田中姓だけのいわゆる<sup>たなかぼか</sup>田中墓がある。

上町西の霊園は、昭和51年(1976)5月6日に改装されて、いわゆる連結式の納骨形式の石塔が建てられた墓地である。浄土真宗がよく用いる「俱会一処」と記された記念碑には、「上町地区の霊場尾の上墓地も絶佳の地に在りながらも 愈々狭隘となり更に擴張の余地もなく 将来之を如何にすべきかにつき 私共地区民は幾回となく協議の結果 納骨堂建設の運びとなり 本年正月を期して着工今日茲にその竣工を見るに至った事は誠に喜びに堪えません。累代先祖の御霊よ、極めて質素な納骨堂<sup>(ママ)</sup>でありますが、どうか心安らかに永久にお眠り下さい」とあり、「尾の上墓地加入者」として35名の名前が連記されている。

また、尾の上霊園は、昭和52年(1977)4月10日に建設され、西と同様に、連結式の納骨形式の石塔が建てられている墓地である。「尾ノ上霊園」と記された記念碑には、「先祖代々安住の郷として上町に生を受け不幸にして一度逝き□ 此処尾の上墓地に郷民相集いて眠り来たるも次第に霊地狭くなり 墓石は点在乱立して御霊を安らかに供養することが不可能となりましたので、関係者協議を重ねて漸やく納骨堂を建立する事が決定しました。本年正月九日起工式を挙行し二月十九日から着工して四月十日茲にめでたく竣工致しましたことを心から喜びにたえません。お見かけの通り極めて質素なものです、美化も考へました次第です。先祖の霊園として永遠に安泰を祈念するものであります。願わくば祖先の御霊よ永久に安らかに眠り給ひ吾等子々孫々に加護あらんことを合掌」とあり、「霊園加入者」として34名の名前が連記されている。

この2つの改装された霊園では、新たな納骨形式の横並びの石塔の周辺には、それに参加しなかった個人の家の納骨式大型石塔もある。それは、前記(A)の、家ごとの納骨施設付き大型石塔と同類のものである。土葬の時代から同じ墓地を利用して来た家々であっても、家によっては、新たな連結式の横並び石塔に参加することを避けて、自分の家ごとの大型石塔を建立した例もあるのである。

### (3) 大型納骨堂の建設 (C)

写真6・7・8がそれである。これは迫の前、後迫(水月院境内)、灰塚、下町などにみられる例であるが、火葬になったとき、前記(A)のように、各家でそれぞれ納骨式の石塔を建てるのではなく、また前記(B)のように、その墓地を利用している家々が一緒になってそれぞれ納骨スペースを備えた連結式の横並びの石塔を共同して建てるのではなく、個人ごと家ごとの石塔は建てないこととして、一見すると寺院に見まちがえるほどの大型の納骨堂を建設してその内部に家ごとの納骨棚を設けた例である。

**後迫地区の事例** 大津町後迫には、水月院(水月庵)という真言宗の古い寺院があり、昭和42年(1967)2月に総工費540万円をかけて大型納骨堂の建設が行なわれた。これは、大津町内では最も早い例である。その記念碑には次のようにある。

「この祖廟は、祖先の忠愛と遺徳を偲び、その霊を弔い、高恩に報いるとともに、子々孫々永久に礼拝の霊塔を築かんため昭和四十年四月発案、賛同者を募り、昭和四十一年四月六十五名の会員



大津町における火葬に対応した石塔の建設（「大津町管内図（2）」平成10年3月をもとに作成）

〔土葬から火葬へ〕……関沢まゆみ

による全員協議会を開催し、会則を定め建設の議を決す。その後この趣旨に賛同する会員は日々に増加し百十七名となり、同年十二月四日総会を開催、建設構想を決定、同月十八日工事契約を締結、翌四十二年一月敷地内の改葬を行い同年二月十七日着工十二月十七日竣工したものである。当時の賛同者百三十四名、総工費五百四拾萬圓

御仏の 慈愛の御手に 導かれ 御霊は永久に 安らかならん」。

住職によれば、この大型納骨堂の建てられている場所から上方に広がっている山の斜面の墓地に立てて置かれた竹筒から蚊が発生するなどして衛生面その他いろいろと問題があったため、役場に勤務していた先代住職が各地の事例を視察して、このような納骨堂を建てる計画を提案し実現したのだという。現在では、「墓地組合」と「後迫納骨堂組合」（区長が筆頭になっている）との両方で管理をしている。「納骨堂組合」は約256軒が参加しているが、この後迫の地区の人だけに限定しているというのではなく、「おいでになる方はどうぞ、どうぞ」というかたちで利用者を受け入れているという（写真6）。

**灰塚地区の事例** 斎藤康弘氏（昭和30年生まれ）によれば、灰塚地区は約74,5軒の集落で、昭和50年（1975）に土葬から火葬へと変わり、昭和50年11月に「灰塚納骨堂」を建設した（写真7）。その工事では、家ごとの石塔を掘り上げて、遺体や遺骨は焼いて新たに建設した大型納骨堂に収容した。総工費は1400万円であったという。この灰塚の納骨堂はJAがまだ墓地関係の営業をしていない、比較的早い時代に作られたものといわれているが、納骨堂建設にあたっては、「死んでからまで一緒になりたくないという人もいた」という。そうして納骨堂建設に反対した家々が、ところどころに自分の家の納骨式大型石塔を建てており、納骨堂には参加していない。

**鍛冶集落の事例** 陣内地区の一画にある鍛冶集落の大型納骨堂は、灰塚より数カ月早く、昭和50年（1975）7月に建てられた（総工費996万円）。

**下町集落の事例** 下町集落の大型納骨堂は昭和51年（1976）3月に建てられた（総工費1710万円）（写真8）。その経緯については、納骨堂の「祖廟之記」に次のように記されている。

「戦後三十余年著しき時代の進展と大企業等の進出による情勢の変容を見、期せずして環境の美化に迫らる、よって区民均しく要望する所に依り、分散せる墓地及び雑然たる墓石を整理すると共に共同納骨堂を建立して祖先の霊を安置し、これを永久に供養せんことを願ふ。爾來各地の納骨堂を視察検討し、此処に位置を定め、約一ケ年の歳月を費し、共同納骨堂を建設するに至る」。

**迫の前集落の事例** 迫の前納骨堂も昭和51年（1976）8月に建てられた。建設の記念碑には「祖霊廟之記」として次のようにある。

「戦後三十余年著しき時代の進展と共に情勢の変容を見、期せずして環境の美化に迫らる。よって同志均しく要望する所に依り、分散せる墓地及、雑然たる墓石を整理すると共に、共同納骨堂を建立して、祖先の霊を安置し、これを永久に供養せんことを願い、爾來各地の納骨堂を視察検討し、此処に位置を定め、約一ケ年の歳月を費し、共同納骨堂を建設するに至る」。

そして、灰塚、鍛冶、下町、迫の前いずれの場合も、大型納骨堂の建てられている周辺の旧来の墓域には、納骨堂に参加していない家々の、自分の家ごとの納骨式大型石塔がいくつか建てられている。

#### (4) 納骨装置の選択と地域社会の分断

大津町内ではこのように、後迫地区の水月院の大型納骨堂が昭和42年（1967）に建設されて以来、昭和50年（1975）に鍛冶、灰塚に、昭和51年（1976）に下町、迫の前で、同様の納骨堂が次々と建設されていったことが確認できる。基本的には集落ごとに従来通り墓地の共同利用が原則ではあるが、個別の家の墓地や石塔を廃止して納骨堂に一括してしまうというまったく新しい方式が提案されたのであり、それに賛同しなかった家々が存在したことも確認できる。そして、それらの家の場合には、他の集落で前述の（A）のタイプと位置づけられた家ごとの納骨式大型石塔と同じ形式の石塔を建立していった。ただし、「死んでからまで同じところに入りたくない」という語りが残されていることからすれば、この地域の人たちにとって、それまでの調和のとれていた土葬の習俗からまったく新たな未知の火葬の採用と納骨装置の確保へという問題が、どれだけ大きな事件であったか、また集落生活の中にどれだけしこりを残してしまうものとなってしまふものであったかを考えさせられる。土葬から火葬へという変化は、単に葬法の変化にとどまらない大きな変化であったことをあらためて考慮し、さまざまな問題点を追跡していく必要があることをそれらは教えてくれている。

#### (2) 荒尾市域の事例

熊本県下の他の地域の例でも、たとえば県西北部で佐賀県に近い荒尾市域では、大津町よりも早く、昭和39年（1964）に向地区の一部という集落で大型納骨堂が建設されており（写真9）、また昭和40年（1965）に今寺地区においても大型納骨堂が建設されている（写真10）。

向地区一部では旧来の家は69戸で、大型納骨堂を建設した時には、それまで長く広く広がっていた墓地を縮小して納骨堂の周囲だけにして、堂内には70戸分の納骨棚のスペースを作り、69戸の利用で始まった。それまで墓地に建てられていた墓石は集めて横に倒して積み、舞台のようにした。当時この事業に関わっていた谷口良一氏（昭和5年生まれ）によれば、その舞台で盆踊りでもできたらと思ったのだがそうはならなかったという。また、



写真9 大型納骨堂（荒尾市向地区一部）。  
昭和39年（1964）建設



写真10 大型納骨堂（荒尾市今寺地区）。  
昭和40年（1965）建設

納骨堂を造ったとき、境内地に桜の木を植えた。今も大きく育っている。「墓地だったから栄養十分で桜の木も成長が早い」などと言っている。またこの一帯では墓地にはよく桜を植える習慣があり、「桜切るバカ」といわれて、桜を切る者はいないともいう。桜は毎年きれいに咲いて死者への供養にもなるという。

この現行の「向一部納骨堂組合同規約」によれば、組合の目的は、「祖先の霊を祭祀する納骨堂を円滑に運営管理し、その荘厳と先祖に対する崇拜の念を永久に保持し、以て地区民の融和と生活の向上に寄与すること」と記されている。そして、「組合は、納骨堂の補修、内外の清掃及び献花を行い、また、毎年1回、祭事を催し、先祖供養を行うものとする」とあり、具体的には、4月に先祖供養祭と総会、4月、6月、8月、12月の納骨堂清掃、8月14日の盆踊りのほか、12月と3月に納骨堂委員会が開かれる。現在は組合員による年間1,000円の管理費で運営がなされている。

一方、今寺地区の大型納骨堂の前に建てられている石柱の「趣意書」には、次のように刻まれている。

「法心一如 吾が今寺墓地を見るに墳墓密集し 将来其の余地少し 亦個々の石碑を完立するは 却々多難な状況に在り されば時代の要求流れに沿ひ 新しく共同納骨堂を建立し 以て祖先の霊を一堂に祭祀し 区民挙げて相和し 自らは安心立命の境地を得んと欲す 斯く信じ斯く悟り 有志再三公民館に集合し 一躍建設の決断を為し 茲に靈廟を建立す

昭和四十年八月吉日

委員長 謹書

起工 昭和四十年五月二日 竣工 昭和四十年八月拾五日」。

この今寺地区の大型納骨堂の建設にあたっては、各家の土葬の墓を掘り起こして焼いていく仕事は他の地区に在住の人たちに頼んだという。「毎日しっかり焼酎を飲ませてやってもらった。土中の甕棺にたまっている死体の油（体液）や髪の毛など気味が悪くて、とても正気ではできないような仕事だった」という。

また、今寺祖廟組合の『祖廟組合同規約』（昭和41年1月制定）には、組合の目的として「祖先を崇拜し、供養を尽くし、組合員の融和・家事精励の気風に努め、御霊の平安を記念する」ことと記されている。そして、事業については、「役員会並びに総会を設け、管理・計画・執行の事業を行う」とし、1. 組合の権利・義務に関する事項、2. 組合の財産に関する事項、3. 祖廟の管轄に関する事項、4. 祭祀に関する事項、5. 組合員の労仕に関する事項、6. 境内造園に関する事項、7. 其の他一般管理・運営に関する事項、があげられている。

60戸分のスペースを設けて、昭和40年（1965）には45戸の利用から始まったが、現在では利用者が増えて満杯になっている。また、治安上の配慮から、1月1日から3日の正月三が日、春秋の彼岸、8月13日から16日のお盆の期間には、午前8時から午後6時、8時、9時と季節によって時間を決めての開放となっている。

**火葬場の沿革** 荒尾市における火葬場の沿革については、昭和17年（1942）に荒尾町、平井村、府本村、八幡村、有明村が合併して荒尾市となった後、昭和19年（1944）11月に万田中区の万田炭鉱（昭和26年9月廃坑）の近くに市営火葬場が設置されたが、聞き取り調査では「まだ、長洲海岸など町の部分は火葬だが、それ以外はほとんど土葬という感じだった」といわれ、市営火葬場の稼働率はまだ十分でなかったものと推測される。

昭和36年(1961)11月に、燃料が薪から重油式に変わり、市の広報誌でも「火葬炉を重油式に改築 衛生課では火葬時間の短縮を計るため(従来の三分の一)火葬炉を重油式に改築工事を行っていましたがこのほど竣工、十一月十五日より使用することが出来ますので御知らせいたします」とある<sup>(5)</sup>。そして、平成2年(1991)4月から再改築が行なわれて現在に至っている。

このように荒尾市域は土葬が長く続いたところであるが、土地の川上偉氏(昭和6年生まれ)や谷口良一氏(昭和5年生まれ)らの語りよると、向地区一部でも今寺地区でも「火葬になったから納骨堂を造ったのではなく、当時(昭和39年から40年頃)は納骨堂を造るのが一つのブームだった。納骨堂を造ってから火葬をすることにしたのだ」という。

**昭和40年前後の大型納骨堂ブーム** 荒尾市域では、昭和40年前後、ちょうど高度経済成長期の真ん中の時期に大型納骨堂の建設ブームがおこっていたというのだが、そこには昭和36年末からの市営火葬場の改装も関係しているものと推察される。行政サイドで火葬の受け入れ態勢が整いつつあったときに、前述の「規約」や「趣意書」が語っているように、先祖への感謝の思いを新たに、旧来の石塔や石柱が林立する墓地の狭隘化を新たな大型納骨堂の建設によって解決しようとしたものと考えられる。

#### 4 盆行事の変化—墓地での飲食習俗の変化

**墓地での飲食** 熊本県下の盆行事のうちで注目されるものの一つが、墓参に際して墓地で先祖の霊とともに飲食を行なう習俗である。民俗学ではそれが早くから注目され報告されていた。

たとえば、上益城郡御船町では、旧暦7月13日の夕方、精霊迎えて墓地に行くと、初盆の家では、提灯を飾り、墓の前に菘を敷いて、家族一同が精進料理や握り飯などの夜食を食べる<sup>(6)</sup>、上益城郡白旗村(現甲佐町白旗)では、13日の夕方、墓地で大人も子供も花火をしたり、爆鳴を發して魔の近づくのを防ぎ人々が集まって坊さんを招びお経を上げ、各戸より持ち寄った食物を一緒に食べる<sup>(7)</sup>、阿蘇郡坂梨村(現阿蘇市一宮町)では、16日の夕方に精霊を送って行って、初盆の家では墓の前にむしろを敷き、にしめなどを作って持って行って夜遅くまで飲食をする、などの報告である<sup>(8)</sup>。

**習俗変化の追跡** これら1940年代の報告から、すでに70年余りがたち、その間の土葬から火葬への大変化を経てそれに伴う墓地の形態も前述のように大きく変化した熊本県下において、このような初盆の家が墓地で飲食をする習俗は、平成24年(2012)の現在ではどのように伝承されているのか、または廃絶も含めて変化していったのかどうか、その追跡確認を試みてみた。その結果は以下の通りである。

##### (1) 大津町域の事例

**錦野地区** 錦野地区では、8月13日～15日がお盆の期間で、初盆の家では親類や隣近所から提灯をもらう。15日の夕方5時頃の墓参りのときには、お煮しめやおつまみやお菓子、そしてお酒やビールやジュースなどを持って行って、お参りに来た人に、「お手塩ですみません」といって食べてもらう。お参りに来た人は初盆の家族に「おさみしいことでございます」といって挨拶をする。

錦野地区の中の御的集落では、平成17年(2005)9月27日に死亡した女性の初盆(平成18年8

月)にお煮しめなども持って行って飲食をしたのが最後で、その後は、飲み物とちょっとしたつまみくらいに省略されるようになっていく。

錦野地区で今も従来通り、初盆に墓地での飲食を行なっているのは上揚集落である。15日の夕方から墓地に提灯を灯してお参りに来た人たちに飲んだり食べたりしてもらっている。たとえば野田富貴子氏(昭和18年生まれ)によれば、「昔は土葬の墓地で、墓参りをすると誰が見ても新しい埋葬なのでヤギウなどで新盆の家がすぐにわかったが、火葬になって納骨式の大型石塔になってからは新仏かどうか、なかなかわからなくなった」という。

なお、この錦野地区では、お盆の墓参りとは別に、正月の1月16日に先祖祭せんぞまつりというのが現在も行なわれている。それはお墓にお煮しめと黄な粉餅などを入れた重箱を持って参り、墓前に焼酎もお供えて、墓地で先祖とともにみんなで飲食する習慣である。先の野田氏は、小学生のころ、この先祖祭の日に学校から帰る途中、墓地のところを通ると、祖母がお酒を飲んで大騒ぎをしているのが恥ずかしかったというが、それくらい賑やかに行なわれていたことがわかる。

**中陣内地区** 高本淳一氏(昭和30年生まれ)によれば、中学生の頃までは初盆の時に、墓地でお参りにくる人を待っていて接待する習慣が残っていたという。夕方6時頃、墓地に参って、煮しめや皿の料理を出して、夜8時、9時ころまで語り合いながら飲食をした。墓に提灯をさげて、そのころはまだ電気がないからローソクの火を灯して、大変だった。子供が花火をあげたりして昔はにぎやかだったが、今では子供がお墓で遊ばなくなった。子供の花火が先になくなり、飲み食いも夏場で暑くて冷やすのに負担が大きいためになくなった。現在では、墓地でのお参りは受けるが、接待はなくなってきている。墓参りには夕方の5時から7時半頃にみんな行っている。

**岩坂地区阿原目集落** 片山敬一氏(昭和24年生まれ)によれば、8月15日の夜、昔は墓地に提灯をとぼして奠座を敷いて、料理を出していた。花火をあげたりして大人も子供も遊んだ。今は、提灯を吊るすだけになっているが、乾き物とお酒、ビール、お茶を墓地で出して飲んだり食べたりしてもらおう。遅くまでやる家では、墓地で夜8時、9時ころまで飲食しながら語り合っている。そのあとで家に帰ってから、料理を食べて飲んでもらう。

**中島地区寺崎集落** 8月15日の夕方、初盆の家は墓地のところシートを敷いて飲んだり食べたりしている。近年では、平成22年(2010)にもそれが行なわれていた。

**鍛冶集落** 大型納骨堂にお参りをするが、今では食べ物は出さず、立ったままで缶ビールを飲むくらいである。

**灰塚集落** 初盆の家では、8月15日に共同墓地の大型納骨堂に参る。その納骨堂前の広場に、新盆の家では、それぞれお参りしてくれた人に、男には缶ビール、女にはお茶を出す。お料理は昔は生ものなどもあったが、今は広場で消防団が焼き鳥の屋台を出して売っている。

以上のように、大津町域においては、初盆の家では8月15日の夜に、お墓にお参りに来た人たちにお煮しめなどの料理を出して、お酒やビールやお茶を飲んでもらう習慣が残っている地区もある一方、飲み物とおつまみだけに簡略化された地区もあり、また廃止されてしまった地区もあることがわかる。

## (2) 荒尾市域の事例

次に、このほか熊本県下の調査事例からいくつかの情報を紹介しておきたい。

『荒尾市史』<sup>(9)</sup>によれば、「8月13日は初盆の家では家族でお墓参りにいく。墓前に料理を供え、持ち帰って家族で食べる。初盆のところは近い親戚から提灯が贈られる」(p484)、「1955(昭和30)年頃までは、もらった提灯はすべて13日に墓前に持っていき、墓の周りを竹で囲んで提灯をつり下げ、その下で飲食をし、騒いでいた」(p486)と記されている。しかし、具体的に市内のどこの地区の事例かは残念ながら明示されていない。そこで、前述の今寺地区と向地区一部集落で調べてみたところ、今寺地区ではお盆にお墓参りはするが、墓地で飲食をする習慣はまったく聞いたことがないということであった(川上澄夫氏〈昭和3年生まれ〉、川上偉氏〈昭和6年生まれ〉)。一方、向地区の一部集落では、昔は15日の昼から暗くなるまで、サカンバチという陶器製の大きな鉢にお煮しめを入れて墓に持っていってお参りにきた人たちといっしょに飲食をしたということが聞かれた。また、大型共同納骨堂になってから現在までも、サカンバチに料理を持っていくことはなくなったが、それでもちょっとしたつまみで飲むことはしているという。

## (3) 牛深市天附の事例

牛深市天附では、佐々木音吉氏(昭和9年生まれ)とコヅエ氏(昭和14年生まれ)によれば、8月15日の午後、新仏への供養のためにとももらった多くの灯籠を、墓地で3~4段にして竹で飾る。初盆の家には親戚や知り合いが、7時頃からお墓に参ってくれるので、お酒やビールなどを出す。夜の9時から先祖や死者の霊を送る船の流しがあるので、それまでにお墓にお参りする。たとえば、平成22年(2010)8月5日に亡くなった小浦哲美氏という、2期4年務めた元区長の初盆の時には、墓地でその家の墓の前に莫塵を敷いて、みんなで飲食して供養していたという。それは、古い形式が残っていた事例といってよい。

昔は土葬で、現在のような立派な石塔はなく、死者を埋葬した上にはタマノヤ(霊屋)と呼ばれる、木でできた家型を据え置き、その周りに海から持ってきた丸い石を置いて、周囲を真四角に囲った。もともと土葬であったが、牛深市茂串に火葬場ができてから、昭和60年前後から火葬が普及していった。昭和60年からしばらくのこのこと、「焼いてくれるな」といっていた人がいて、その人は土葬にしたという。そのころはもう火葬になっていたが、その人だけは本人の希望もあり最後の土葬であった。調査に協力していただいた佐々木家の例でいえば、昭和60年(1985)4月に納骨設備のあるやや大型の石塔を建てている。

文化庁の『日本民俗地図』<sup>(10)</sup>I(1969年)によれば、この牛深市天附では旧7月13日~15日がお盆で、15日夜、墓に燈籠をともし、墓で飲食するという記述がなされている。しかし、それはまだ、埋葬地点上に霊屋が置かれたかたちの墓地に、初盆の家が提灯を飾り、莫塵を敷いて、お参りに来た人と飲んだり食べたりして過ごす、そういう光景の時代だったと考えられる。それが現在のような台座に納骨設備をもつ大型の石塔が建てられるようになると、その墓前には莫塵を広げる場所もなくなったため、もうそのようなことをする家もなくなった。しかし、平成22年(2010)に亡くなった元区長の場合には、大型石塔の前の通路などを利用して莫塵を敷いて関係者が集まって飲んだり食べたりすることが行なわれていたという。人望のあったという元区長であるが、その墓前での飲

食には、旧来の習慣がそこにまだ残され伝承されていた可能性が大きい。

#### (4) 身近な死者から遠い死者へ

以上のように、熊本県下のいまみた地域では、初盆の家では、墓地に提灯をたくさん吊るして、お参りに来た人にお煮しめやビール、お茶を振る舞って、仏の供養をするということが行なわれてきたことがわかる。しかし、墓地の景観を代表していた個々人の小型石塔や墓上装置のヤギユウ(大津町)、ヒオオイ(荒尾市)、タマノヤ(天附)などがいっせいに消えていき、新たに大型の納骨式石塔が墓地景観の主流となり、また地区によっては個々の墓がなくなって大型納骨堂だけが建てられてきたことにより、人びとの死者に対する感覚にも変化がみられる。それは、「一人ひとりの墓の時は話しかける相手が決まっていて、話をすることもできたが、みんな合同の納骨式の墓になると誰に話しかけていいかわからない」という高本梢氏(昭和18年生まれ)の言葉によく表れている。

大津町域の場合、いまみたお盆だけでなく、正月16日の「先祖祭り」、春の桜の季節の墓掃除とお花見、春秋の彼岸など、その折々に墓参りがなされ、「先祖様にもちょっと食べてもらおう」ということで飲食をする、という習俗がいまも行なわれている。この地域では、死者の霊は遺骸を埋葬した墓地にあり、その墓地こそが先祖と子孫との交流の場であるという感覚が強い。それがこの地域の墓をめぐる習俗の特徴である。そのような死者と生者との墓を媒介とした密着感、親近感という関係性が強く伝承されてきていた背景には、土葬という葬法と、ヤギユウ、ヒオオイ、タマノヤなどの墓上装置と、死者ごとの個別の小型墓石、という三者をもって死者を特定できてきたことが重要であったと推測される。しかし、それがいま、火葬となって必然的に大型共同納骨堂などへと変化していることによって、「誰に話しかけていいかわからない」という違和感を語る人たちがいる。土葬から火葬へという変化は、地元の人たちにとって知らず知らずのうちに、死者との親近感や密着感という目に見えない感覚や観念をも根底から変えつつある大きな変化としてとらえることができる。

#### 註

(1)——林英一『近代火葬の民俗学』法蔵館 2010年、関沢まゆみ「火葬と生命観」連携研究「自然と文化」研究連絡誌『人と自然』1(火をめぐる人と自然)2011年など。

(2)——関沢まゆみ「土葬から火葬へ—火葬の普及とサンマイ利用の変化:滋賀県下の事例より—」『民俗学論叢』26, 2011年

(3)——本館基幹研究「高度経済成長と生活変化」2007～2009年、基盤研究「高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する調査研究」2010～2012年、基盤研究「高度経済成長と地域社会の変化」2013～2015年が行なわれている。

(4)——『荒尾市勢要覧』1952年版の「市営火葬場利

用状況」によれば、昭和21年529件、22年363件、23年386件、24年492件、25年388件、26年383件の利用があった(p80)。

(5)——『広報あらお』No.204, 1961年

(6)——梅田之「熊本県御船地方の盆」『民間伝承』9-3 1943年

(7)——藤原正教「御船地方の年中行事」『民間伝承』12-11・12 1948年

(8)——丸山学「阿蘇の年中行事」『民間伝承』12-1 1948年

(9)——『荒尾市史 環境・民俗編』2000年

(10)——文化庁『日本民俗地図』I(年中行事I)1969年, p404

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2012年12月28日受付, 2013年3月26日審査終了)